

◎ 連合会だより

事業を進めていくために、人と金とモノが必要だが、その裏にあるというか根本にあるものこそ重要であるというのが、労協の全組合員経営や共感の経営で表現していることだ。労協法を準備する過程で、その法目的が鮮明になって来ている。

これまで、労協とは、所有と経営と労働が三位一体となったものであると説明してきた。しかし、どうももうひとつ心に落ちないものが残っていた。全組合員経営の文脈とピタッと重なって来るのは「協同労働のための協同組合」という労協法の法目的として明確にしてきた内容である。労働者が企業の主人公になれるか、資本が労働を使うのではなく、労働が資本を使う、仕事から切り離された苦役としての労働ではなく、仕事を自分のものとして生きがいのある労働ということで語って来た労協の本質は、労働の復権、ひいては人間の復権、さらに地域の再生、そして連帯を一連のものとし、「協同労働」にこそあり、その実践

的表現が全組合員経営、共感の経営である。

その本質の理解と組合員としての成長は、実践を通じて、ひとつひとつの事実をどう評価し、いかに作りかえるかということに日常的に挑戦していく以外にないのではないか。成長のためのプロセスの出発点の確認が是非とも必要である。ここに来て、幹部の水準があらためて問われていると思う。資本家たちの経営手法にとらわれることなく、人と金とモノを皮相的にうまく使ってやろうといううすっぺらさにとられず、旧来の組織運営の手法をかなぐりすて、真の人間の再生へ幹部自らが脱皮すべきである。高齢協の広がりや労協法で示された労協についての本質議論はその絶好のチャンスといえる。折りしもマスコミの注目は、それに拍車をかけてもいる。自らを振り返りながら、あらためて、労協への思いをあらたにしたい。

鍛谷 宗孝（労協連合会・専務理事）

◎ センター事業団だより

冬らしい寒さも充分実感しないまま、かなり早い桜の開花も雨にたたられ瞬時に散り落ち、季節の節目が曖昧なまま春が訪れた。

97年度はセンター事業団にとって、多くの「変化」を意識し、重要な岐路を意識する年となった。高齢協運動・協同集会は、「協同」のより本質的な価値と、多くの人間的な営みをつなぎ得る要の役割が、今のセンター事業団に必要とされており、このことから、個々の意識・組織のしくみや力を再評価し、変化の方向を具体化するに余りある成果を示した。

4月5、6日は、全国所長会議で総代会の議案討議を行った。第2次中期計画の後半3ヶ年の計画を定める大事な議案。少し長いスパンでの計画のため、抽象的になりがちではあるが、どのような事業を展開していくのか、どこにお金を使うのか、そのお金はどうやって蓄えていくのかが大きなテーマであるが、このテーマに関連して、セン

ター事業団の全国組織としての意義と事業所・各地域での自立や市民権を得ることを両輪にする運営、さらには、これら全てに関わって、労協を人生の一つとしてやり抜く「人」の獲得と成長をどう進めるかが、基盤をなす課題といえよう。

春はリフレッシュな季節。今年も13名の新卒と5名の中途採用の事務局員候補を迎え、第1回研修会を終えた。多くのことは、これから始まる現場・事業所の中で一つ一つ覚え身につけていくが、「今」を形成した過程を知り、「今」を支える価値から未来を指向することが必要不可欠な「学び」である。同時にその「学び」は、自分自身の形成そのものであり、その中で自分の価値観や思いも変化していく。自分も回りも「固定化」せず、「変化」を前提にその道筋を共に描いていきたい。そこにこそ協同の価値は存在しているのだから。

古村 伸宏（労協センター事業団・事務局長）